

---

# ねむり魔女

神無月 あき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねむり魔女

### 【Zマーク】

Z72040

### 【作者名】

神無月 あき

### 【あらすじ】

どこか遠くの、過去か未来かいつかの話。

齢十程の少女『クレア＝ロッド＝マーリージュ』は百年の永劫を生きる魔女である。

永久とも感じる時を生きる彼女は、しかし、その大半を夢の中で過ごす。

それは忌まわしき呪いのせい。

その呪いは百年に一日だけ彼女を夢から解放させる。

今日はその日覚めの日であった。

目覚めたクレアはある事に気が付く。今の季節が秋であることに。  
そして、彼女は秋の風に魅かれて久方ぶりの下界へと赴くのであつた。

「…………ん、ふわ？」

大きな呼吸。それに続けてうつすらと目を開く少女。

天蓋のついたベッドに身を任せている彼女は、余りに広い部屋の中央で目覚めの時を向かえた。

ゆっくりと半身起き上がる。

「もひ、起きなきやいけないのか…………」

ぼそり。と、少女は誰に言つてもない言葉を漏らす。それと動きを合わせる様にハラリと流れ落ちたブロンドの艶やかな髪。その綺麗な長い髪に劣らない顔立ちがまた髪の美しさを際立たせて、美人である事を部屋に一枚ある大きな姿見の鏡に映している。

ここは人里とはかけ離れた山間に作られた屋敷。山と森に囲まれた屋敷には下界へと通じる道は無く、自然の中にある他の木々と同じように生えているかの様。いつからここに建っているのか、誰が建てたのかは分からぬ。ただ一つ分かること、それは、この屋敷に住んでいるのがまだ幼い少女一人という事だけ。魔法を使う少女が。

「せつかくいいところだったものを……。何も『ザガート』を目の前

にした所で目が覚めなくてもいいのにな。間が悪い」

膨れつ面を作つて床を踏む。

窓からチラリと覗ける空は透き通るくらいの蒼で、太陽が恵の光を大地へと与えていた。

「嫌な天氣…………。眩しいし、肌焼けそうじゃない。確か前回もこんな晴れ晴れとした日だった気がする。せめて雨が降りそつた程に暗い曇りの日にしてくればいいものを…………」

少女はそう愚痴を溢すと、もつー齧空にくれてやつた。

しかしそこで、ふと、ある事に気付いた。空がとても高っこい。

その空は部屋の奥へと消えよつとしていた少女を引き止め、窓へと寄せた。

ガチャリ。

窓が開ぐ。そこからふわりと、秋の柔らかい涼風が入り込んでくる。

「秋か…………久々だな」

少女の顔から寝ぼけた眼が消え去つていた。

少女の名前は【クレア＝ロッシュ＝マーティュ】。一見、十歳に満

ちて間もない程に幼く見えるのだが、この世に生まれ出でて、すでに百万年は経っていた。

彼女は魔女である。

しかし、魔女であっても百万という途方も無い年月を生きる者はいない。それでも永劫とも取れる時共に在り続いているのは、【呪い】の為である。

この辺りはいつになつても変わることはないんだな。

外行きのブラウスの上に黒いマントを羽織つて、簾に腰を預け空を飛ぶ。久方ぶりの簾と風を切るスピードを感じながら、眼下に広がる黒い森を見下ろしてクレアはそう思った。

彼女は百万年も生きている。ただし、自由気ままに生き続けてこられたわけではない。百年間、寝続ける、といつ呪いに縛られていなのだ。老いることも無く、死ぬことも許されず。

今年は一度その百年の区切りの年に当たり、今日が一日だけ目覚められるという解放の日と云うわけである。

秋に目覚めるなんて五万年ぶりかしら？ 最近はずつと夏ばかりで、たまに春の時があるくらいだつたものな。

下界に近づくにつれ、色めき出す木々の葉。リアルな紅葉を目にすることは本当に久しぶりの事で、新鮮な感じがクレアの気持ちに染み入つてきていた。

クレアが屋敷の外へと出るのは、実に三万年ぶりの事である。呪

いをかけられた当初は、解放の年が来る度に解呪の研究をしていました。しかし、一日しか起きていられないという制限は研究の大きな妨げとなり、いつまでも成果を実らせることはなかつた。

十万年程経つてからは好きな事にのみ注力してきた。時は無限にあるので、百年毎にやつてくる日覚めの時を待ち焦がれ、その日に伸ばせるだけ羽を伸ばして過ごした。しかし、この行為も五、六十万年も経つとしたい事は尽きてしまい、全てがつまらなくなつてしまつた。世界を滅ぼしてやろうとしたこともクレアは思いついたが、やはり一日で成す事は出来ず、国を三つ潰す程度しか出来ないでいた。

次第に彼女は解放の日の為に起きること自体が面倒になつてきていた。現実の世界で何か出来なくとも、夢の中で行う事が出来れば彼女には十分になつっていたのだ。しかし、眠りの呪いは解放の日に眠ることもまた許してはくれない。その為に彼女は、この三万年間は目覚める度に、屋敷の地下にある書庫で、何度も読み返したか分からぬ読み物を漁る事を続けていた。

そんな中で、久しぶりに表へと出たのは、秋という季節が久しぶりという以上に、クレアにとつて思い入れのある季節だからであつたのだろう。

數十分程篝の旅をした所でふと彼女は思つた。

「おかしい。たしかそろそろ人里が見えてくるはずなんだが、……」

数万年前の記憶を辿れば確かに今見下りしている森の辺りは、見渡す限りの人工建造物が広がっているはずだつた。

いつまで経つても現れない人工物にクレアは一つの思いが浮かぶ。

また文明が滅んだか？

これまでにも何度も人間の築き上げてきた文明の生き死にをクレアは見てきた。そんな彼女には一文明が滅んだことは珍しい事には感じない。

三万年も経てば二、三度文明が生まれ滅ぶのも当たり前か……。

そう納得すると、彼女は簫の推進をスッと止め、その場に浮かび留まつた。

せっかく人々に人間界を見て回りたいと思つたのに。仕方ない、もう少し南の方に出てみるかな。

簫に弧を描かせて方向を変える。柄の先端を南に向けると、簫に魔力を送つて、再度推進力とした。

目的を達すことが出来なかつたクレアであつたが、さほど落胆の色は強く出ではない。体で感じる秋の空気と紅葉の賑わいが彼女をそうさせていた。

彼女の人生の大半を占めている夢の中でも、何度も秋を体験しているが、五感で感じる秋と比べると余りに薄い。色濃く体に入つくるリアルの感覚はとても夢の中では感じることの出来ないものであると、クレアは改めて思つた。

しかし、そこでにわかに彼女の表情に影が差す。

それでも、夢の中の秋で不自由はしないさ……。

田の色がすっと薄らぐ。いくらリアルがよくても、自分には決して手には入らない。その事を体の隅々の細胞でまで悟つてゐる彼女は、リアルにすがる虚しさもまた、悪い意味で良く理解していた。

リアルへと執着する心を理性が冷酷に圧しこめていった。

暫く、その虚しさを心に残したままクレアが飛行を続けていると、ふと、目に止まるものが一つ。

人か？

自然の中で浮いた色の服装が、クレアの目にその青年を捉えさせた。

人が出てきたってことは、里が近くなってきたってことか。ちょうどいい。あいつに人里の場所を尋ねよう。

幕のスピードを落として、ゆっくりと下降していく。地面ストレス

しまで近づいたところで、クレアは幕から飛び降りた。

「おい、そこの人間。尋ねたいことがあるんだけど

青年の後方に降りたクレアは、そう声をかけながら近づいていく。

「え？ 僕、ですか？ なんでしょう？」

突然に声をかけられたからか、戸惑いながら声のした方、クレアの方へと顔を向ける青年。

「」の近くの人里を知りたい…………え？」「

背筋を電撃が走り抜ける。

振り向いた青年の顔を確認した瞬間、クレアにもまた戸惑いが生じたのだった。

「…………ハリス？」

思わずクレアの口からその名前がこぼれた。

頭の奥底から噴水の様に記憶が湧き上がりてくる。クレアにとつて、その記憶は最も古く、そして最も強く残る記憶だった。

「あの…………？　どうしたんですか？」

急に固まってしまった少女に青年は、覗き込むようにして声をかける。

「…………お前、まさか…………ハリス…………なのか？」

記憶の中の男と、今日の前にいる青年がクレアの中で重なっていた。

しかし、その記憶の男は遙か古の存在。今の時代に生きているはずがない事はクレアも理解していた。しかし、この青年にその正否を聞かずにはいられなかつた。

青年は暫くして、少女の言葉が自分を指している事をやつと理解して、一層慌てた。

「あの、違います！ すみません、突然だつたもので混乱してしまつて……僕はアジヒといいます」

青年からの返答を待ちわびていたクレアは、その答えに顔を曇らせる。

分かつてしたことではあつたが、それをほつきひとつ告げられると、明るい気持ちにはなれなかつた。

「えつと、町をお探しでしたよね。もう少し降つた所に、僕の住んでる町があるんです。丁度帰るといひましたし、よかつたら案内しますよ」

アジヒと言つた青年は、静かに佇むクレアに笑顔で接した。

クレアはすでに人間界の事はどうでもよくなつてしまつていた。が、アジヒのあまりの笑顔に、もう少し外の空気を吸うこととした。

「今、お茶煎りますね」

アジヒはそつまつと、奥のキッチンへと姿を消した。

あれから歩いて三十分程で、それなりに賑わつた町へと着いた。そこでアジヒから、せつかくなのでお茶でも「馳走します」と言わ  
れ、クレアは今彼の家にいる。

別にお茶をしに人間界を目指していたわけではない。しかし、ア

ジエの笑顔の誘いに断る事が出来ないでいた。

部屋を見渡していると、棚に一枚の写真が立てられている事に気が付く。アジェが友人と撮ったものだった。

やつぱり似ているな、ハリスと……。

クレアはハリスの事を忘れた事は無い。だが、これほどまでに大きく頭の中を占めた事は久しく無かつた。分かっていても、この青年とハリスを重ねて見てしまう。

「アジェは、森で何をしていたんだ？」

部屋の中を見る限り、獵師ではないことが分かる。獵銃や獸の皮などは無いし、火薬の匂いもしない。となれば木の実か茸でも採っていた事が想像できるが、何か話のキッカケが欲しかったクレアは、それを話題に選んだ。

「クレアさんはミルク入れますか？」

トレイにポットと二つのカップを乗せて、帰ってきたアジェ。クレアの座っているテーブルにカップを移してから、琥珀色のお茶を注いで自分も椅子に腰を下ろした。

「私はこのままいい」

クレアはそう言って、アジェが手にしたミルクを制すると、カップを口に運ぶ。ダージリンの香りがした。

……紅茶の煎れ方も同じか。

「僕は木の実を採りに行ってたんですよ」

アジエも一口飲んでから、先のクレアの話に返事を付ける。

「季節だものな。収穫はあったのか?」

「えへっと…………それが…………」

あさつての方向に視線を当てながら、頬をかくアジエ。その仕草はクレアにどれほどの収穫だったかを教えていた。しかし、それ以上にクレアは感じてしまつ。

「この誤魔化す時の仕草も…………ハリスと…………」

「あ、クレアさんは森で何をしていたんですか?」

つまい誤魔化しが見つかなかつたのか、アジエは話題をクレアの事へと向かわせようとした。

急な話の変更にクレアは思考が一瞬停止させられてしまう。しかし、口に含んでいた紅茶をゆっくりと飲み込んで、窓から見える木々の紅葉に目を向けた。

「散歩だ。秋は好きだから」

視線はそのままに、返事を返した。

頭の中にまたハリスが強く浮かび上がる。クレアがハリスと出会つた季節も今と同じ、紅葉が鮮やかな深い秋の日だった。

視線をアジェに戻す。その時、アジェが一瞬だけ記憶の中のハリスの姿に見えた。

ハリス……！？

胸の奥が疼いた。

クレアは目の色を薄める。その疼きを押し込める。

「あ、そういうえば僕、クッキー焼くのが趣味なんですよ。木の実を採りに行つたのも、クッキーに使うからなんです。今、持つてきま  
すね」

急ぎ、台所に駆け込んでいくアジェの背中を見つめていた。

アジェはハリスじゃない。ハリスはもういない。分かつてること  
じゃないか。

言い聞かせる。心の中の弱い自分にしつかりと。

クレアはこれ以上ここについては、抑えこんでいた様々な思いが溢  
れてきそうだった。だから、クッキーを食べたらすぐに去ろうと決  
めた。

その思いの直後にアジェが顔を見せる。

「おまたせしました。これは今朝焼いた物なんんですけど、結構な自  
信作なんです。この紅茶とよく合つんですよ」

差し出された縁が可愛い皿にはクッキーが綺麗に並べられている。丸く狐色に焼かれたクッキーは見た目にも食欲をそそつたが、バターバターの香りがそれを更に増していた。

美味そつじやないか。自信作というだけの事はあるか。

クレアはアジューの力作に感心しながらそれを口に運んだ。

一一度、三度、碎かれたクッキーはクレアの口の中全体にその味を広げていく。

と、そこでクレアの動きがピタリと止まった。

「どうですか？ 胡桃を碎いたものを混ぜてるんです。さつき言ってた木の実がそれです。お口に合えばいいんですけど」

自信のクッキーの製法を種明かしするアジューにしかし、クレアは下を俯いたまま、微動だにしていなかつた。

その様子にアジューは顔を曇らせる。

「あの…………もしかして、美味しくありませんでした？」

声をかけられてもクレアはそれに返事をしない。

変わらず顔は下を向いて、前髪で皿が隠れている。

流れる沈黙。

窓の外では空風が色付いた葉を舞い上げていた。

クレアのだんまりに合わせていたアジェだったが、沈黙をじつにかじょうと、口を開いた。

「あの、」

その時だった。

「どうして……？」

クレアがぽつりと、小さな気泡が割れたかのような声を出した。

「じつじつ……このクッキーの味まで一緒になんだ！」

突然声を上げたクレアにアジェは戸惑つてしまつ。しかし、クレアはそんなことは気にせずといった様子で、今の言葉を続けた。

「私の……私の良く知つてゐる奴も同じ味のクッキーをよく私に食べさせてくれた。胡桃のクッキーだ。クッキーだけじゃない。この紅茶も同じ！ そして仕草も……顔も……。だけど、そいつはもういないんだ！ お前は違う人間なんだ！ なのになんで同じなんだ！？」

溢れていった。記憶と想いが抑えきれなくなつていて。心の中で自分に言い聞かせていたことを、口にまで出して必死に自分を抑えようとしていたが、出来ないでいた。

「クレアさん、何を言つて、」

「ハリスなんだよ！ どう見たって、見ないようにしたって、ハリスが出てくるんだ！ 百万年前、出会って、優しくしてくれて、好きになつて、でもそれで神の怒りを買って、私は呪いをかけられて、こんなにも私は生かされて、だけど、ハリスは生きているはずがない！ ハリスと現実で会えるだなんて事があるわけがない！！ こんなにも目で、耳で、手で、心で、感じられるはずがない……」

クレアの叫ぶ声の後、部屋を支配したのは彼女の荒い息だった。

百万という年月の間、少しづつ抑え込んできた、愛した者がいない牢獄のような世界に身を置かなければならぬという現実の、絶望、空虚、悲愴がゴボリと湧き出し、にわかに暴れだした。その心の闇と理性が対抗していて、クレアは狂氣の淵に立つていた。

クレアの言葉をアジョは静かに聞いていた。そして、そつと少女の背中に手を添える。

「クレアさん、心を縛ると、その分だけ辛いことが滲み出て来ちゃいますよ。素直に、心の思つままにしていいれば、安らぎが生まれます。もし、そのハリスさんを感じたいなら感じればいいじゃないですか」

笑顔。背中に生まれた温かさと、その柔らかい言葉に顔を上げるところにはアジョの微笑んだ顔があつた。クレアの目にはハリスの笑顔が映つていた。

「ハリス……」

アジョの言葉がクレアの乱れた心をゆっくりと、静めていった。

…………感じてもいい…………ハリスを…………目で、耳で…………心で。

ハリスへの想いを溜め込んだ心の扉。それに巻きついていた鎖が  
じゅらりじゅらりと解けていく。

夢の中のような薄いハリスじやなくて、現実の鮮明な彼を感じて  
も…………いい！

ガチャリと心の扉の鍵がおちる。

ハリスと…………ハリスと一緒にいてもいいんだ！！

扉が開く。想いを閉じ込めていた重い扉がゆっくりと口を開けて  
いく。

ハリス！！

「僕がそのハリスという人に似ているなら、僕を通してでもハリス  
さんを感じてください。それでクレアさんが楽になるなら、毎日遊  
びに来てくれてもいいです」

アジェがそう言つて二コリと笑う。

と、そこでしかし、開きかけていたクレアの心の扉がピタリと止  
まった。

…………毎日。

アジェの言葉の一部分が、クレアの静まつた心に波紋を作った。  
その波紋はうねり、波となり、クレアの心の中を駆け走った。

……私は呪いがかかるている……毎日なんて……。

大きな波と化した絶望が唸り声を上げながら、開きかけた心のドアを封掛けていく。

次に朝を迎えた時は……また百年経つていいじゃないか!!

ドアが勢い良く閉じた。

「どうしました？ クレアさん？」

口を閉じ、俯いたクレアを覗き込むよつするアジェ。

それに対しても、少女は静かに席を立つた。

「クッキー 美味かった。礼を言つたぞ」

それだけ言って、クレアは部屋の出入り口に爪先を合わせた。

「ちょ、 ちょっと、 どっこく…………？」

クレアを呼び止めるように、伸ばした手が宙をかいた。

クレアは止まらない。そのままズンズンとドアへと向かっていく。

そして、ドアをガチャリと開けた。

秋の風がクレアを包み、アジェの部屋の中に迷い込んだ。

「私は…………お前と同じ時は過ぎ」せない。この時が私にとっては幻のような夢の世界なんだ。だから、この世界の事を感じることは出来ない。特に、お前等人間の事を感じる事は。もし感じてしまったら…………」

そこまで言つて言葉が詰まつた。

喉から声が出なくなつていた。代わりに目から涙が溢れて頬を伝つた。

急いで簞を掴んで、空に飛び込む。

「クレアさん！」

アジヒの声が耳に届いた時、クレアがもう家の屋根の遙か上にいた。そのまま、自らがいるべき屋敷へと逃げるよつて飛んで行く。

空に出ても涙は止まらなかつた。

分かつていた事だつた。この世界の事を、五感で感じる事が出来る鮮明なこの感覚を心に入れてはいけないという事を。

自分にはこの世界のものは手には入らない。ハリスト一緒にいられなかつた。それをまた手に入れようとしたら、こんなにも胸が苦しくて仕方が無い。クレアはそう後悔しながら涙を流し続けた。

もつと、心の扉に鎖を巻いつ。現実のものを欲する事の虚しさを刻んで、硬く硬く。

しかし、クレアがそう心を開かなければするほど、苦しみが

滲み出て来て仕方なかつた。

アジヒの言ひ通りじゃないか……。

心を閉ざすほど涙を出していく涙に、アジヒの言葉が頭を過ぎつた。  
そしてハリスの事も思い出してしまつ。ひまわり…………  
どうして…………、どうして私はこんな辛い目にあわなくてはいけないんだ…………！

一度解いてしまつた心は、簡単には戻らず、古に味わつた、何度も  
心を支配していた負の感情が、何十万年ぶりに蘇つていた。

秋の風には冬の息が少し混ざつていた。

クレアが今日という解放の日に手に入れたものは、胡桃のクッキ  
ーの味とハリスの気持ちと一緒に圧し込んでいた、現実世界への執  
着だつた。

彼女はこの思いを抱いたまま、また百年眠りへとついたのだった。

「い」苦勞様～

アジヒの部屋にその声が響いたのは、クレアが飛び出してから間  
も無くだつた。

「これでよかつたんですか？」

部屋の中にはアジョ以外は誰も居ない。しかし、彼の言葉のすぐ後に、部屋の一部の空間が歪みだした。

刹那、そこから人影が生まれ出る。長い黒髪で、長身の若い女だつた。

「上出来よ。陰から見ていて、とっても愉快だつたわ」

左の手の甲で、笑う口を隠す女。その笑みは厭らしく陰湿で、整つている皿鼻立ちをぬ無しにしていた。

その女には腰を低くしたアジョが近づいていく。

「あの、それじゃあ早速、約束の物をいただけますか？」

「やうね、ちやんと働いてくれたものね。ほら、これでいいんでしょ？」「うー

女がパチンと指を鳴らす。すると、テーブルをコン、コンと二つの光るもののが落ちて鳴らした。金貨だった。

アジョはすぐさまその黄金に輝くコインに飛びついた。

「へへ、ありがとうござります。でもあのクレアって魔女泣いてましたよ？ あれこれでしなくてもよかつたんじゃないですかね」

別にアジョは女に反論したつもりはなかった。ただ、金貨が貰えて調子に乗つていただけだった。ところが、女は今まで上げていた口の端を上げて、アジョを睨むような皿つきになつた。

「何も知らずに人間風情が。あの魔女はね、あたしの男を寝取ったのよ！？ チャームか何か使つたんでしょうけど、許されるわけ無いじゃない！だから呪いをかけてやつたのよ！なのに、たった百万年程度でケロつとしちやつて……だから、色々と思いつき出させてやつたのよ。辛くない呪いなんて、呪いじゃないじゃない」

女は再度笑つた。しかし、その目は醜い情念に支配された黒い光を放つていた。

アジェはそのおぞましい表情に息を呑み、今まで浮かれていた気持ちが一気に冷え込んだ。

これがかつて一人の男を愛した女の成れの果てか。

「神様というのは、怖いぐらいに嫉妬深いのですね」

口では神という言葉を使ったアジェだったが、しかし、心の中では目の前の神が醜い心を持つた人間以外に見えなかつた。

神といつても所詮は女か。

アジェは絶対的な力を前に怯えながらも、不信心な考えに苦笑してしまつた。

終。

(後書き)

2007年  
2010年 作  
加筆・修正

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7204o/>

---

ねむり魔女

2010年11月12日22時10分発行